

## 第二章 首なし死体の謎

1

「変な事件にわたしまき込まれそうよ」

日報新聞社・社会部の宿泊室に宮坂千香子から、比呂あすか殺人事件の第一報が入った。宿泊室と言ってもソファにごろ寝、ねぼけ眼で森中弘光は受話器を耳にあてた。

宮坂千香子は日報新聞が発行しているスポーツ紙の芸能部に所属する記者で、新進歌手比呂あすかのスキャンダル種を追っている最中だった。

千香子と森中は恋人同士の関係にある。社会部の森中に取材協力を申し出てきたのは二人が特別の関係にあるからだだった。

「変な事件？寝覚めの悪いことを言わんでくれよ」森中は機嫌の悪い声を出した。「ぱっちり目がさめるわよ。首なし死体で、比呂あすかが発見されたの」

「うん？首なしだと？」

やっと森中の全身に血がめぐった。

「状況をたずねる前に、現場にいらっしやいよ。場所は渋谷・恵比寿の彼女の住むヒルズマンションの地下駐車場よ」

「よし、わかった」

電話を切ると森中は、すぐに社を飛び出した。日報新聞社本社は東京都心の地、大手町

にある。森中が腕時計を見た。

日付け版のついた腕時計を見る。

五月十一日、午前七時二分と読めた。あと二時間も経つと、サラリーマンがどっと寄せて来る場所だったが、まだ、あたりは閑散としていた。タクシーを拾い、森中は恵比寿の現場に向かった。前に別の取材でヒルズマンションに彼は出向いたことがあったので場所はずぐにわかった森中は首なし死体という情報に興味を持った。

比呂あすかのことについては、森中も少しは情報を得ていた。

比呂あすかのスキャンダル種を追っている千香子が調べたところでは、比呂あすかは富山県宇奈月町の出身であった。

日報新聞社富山支局に森中が在籍していた関係で、森中は逆に千香子から比呂あすかの生い立ちなどを、富山支局の者の力を借りて調べてくれるよう依頼されていたのだ。

比呂あすかのことを調べたのは、富山支局の仲条立彦だった。

比呂あすかは芸名で本名は野々村久美、出生の事情は複雑で、あすか自身は私生児であった。認知した父親が山崎誠一郎、母親は地元宇奈月温泉で中居をしていた野々村芳子ということになっている。

仲条は直接の関係はなかったが、たまたま、森中からの依頼で、比呂あすかの素姓を調査したところ、山崎誠一郎の名が出て来たので、彼は彼でとまどいの気持ちを持った矢先の出来事だった。

（庄川征雄が首なし死体で発見され、次に比呂あすかが、また、首なし死体で発見された？この二つの殺人事件には何か、因果関係で

もあるのか？)

タクシーの中で、森中は二つの事件を結びつけ、あれこれ、推量を働かせた。庄川征雄殺人事件との関連性について考えてみた。

庄川征雄殺人事件では、警察はまだ真相を発表していなかった。

解剖所見では死因は剄部(けいぶ)圧迫による扼殺(やくさつ)と断定されていたが、首の見つからない死体なのに、扼殺とは理に合わない発表の仕方であった。

もちろん、黒い雷鳥の魔符<sup>マジツ</sup>の存在についても警察当局は伏していた。

これから最盛期を迎える観光シーズンに猟奇事件は差し障りがあるので警察は事実を隠したようだった。

JR恵比寿駅近くの小さな坂を上った地点に比呂あすかが住んでいたヒルズマンションはあった。マンションは七階建てで、駐車場は地下一階にある。

森中が見たところ、地下駐車場への出入路の先に、警察関係者が群れていた。

すでに近くにはロープが張られ、近づくことは禁じられている。

森中は千香子を探した。

現場にいくと手つとり早く事件の状況を知ることが出来るのに、千香子の姿は見当たらなかった。

「比呂あすかの死体が発見されたのはどこです？発見時刻は？」

森中は千香子を待ってはいられないので、早速、取材を始めた。捜査員らしい男が、森中の顔をじろりと見やっってから、

「いま確認中だよ。死因も、現場の状況もな

。朝刊に間に合うわけじゃないんだから、そう殺気立つな。まあ、有名タレントだから、わからんでもないが」

と、言い、待たせてあったパトカーの一台に乗り込んだ。

「森中さん、わたしはここよ」

千香子の声が出たので見ると、いつの間について来たのか、彼の背後に、千香子が立っていた。短めの髪にジージャンとジーパン姿、活動的なスタイルだった。

「わたし、第二発見者なのよ、事件の」

「第二発見者？第一発見者ならいま頃り調べべの最中なものな」

「朝から嫌なもの見ちゃった。これもひとのプライバシーをのぞこうとした罰ね」

「仕事のほう大忙しか。仏さんが丁度追いかけていた当人だとは、ツイているようなツイていないような」

「ね、モーニングコーヒーの時間にしましよ。夜どおし張っていたから、眠気覚ましが必要よ」

森中は千香子の意を受け、近くの辻の角にある喫茶店に千香子を伴った。

道々、千香子が森中に言った。

「あの女（こ）の後援会長は室堂建設の長門蓮作会長でしょ。県人意識というか、同じ富山県の出身、どうも、比呂あすかは、会長の愛人らしいというところまでは突き止めたんだけど」

「そんな話はあとで聞かせてくれ。首なし死体なんだろ？シヨッキングな事件さ。朝から嫌なもの見ちゃった？その眼でばっちし、目撃したってわけか？」

「写真週刊誌、マンデイズ」のカメラマンと

一緒に張っていたのよ。それで」

と、千香子が言ったとき、二人は喫茶店に着いた。二人は隅の席で向かい合う。

写真週刊誌、マンデイズ、やはり日報新聞社系列の出版社が出しており、千香子は共同作戦でスキャンダル種を追っていたのだ。

「比呂あすかは夜半の二時すぎにあのマンションにもどって来た。わたしはそのあとのことはカメラマンに任せて、駅近くのビジネスホテルで仮眠したの。コンビニエンスストアで彼の朝食のおにぎりを買ってまた車にもどったのが朝の六時すぎ。これで見張りは、三日目、二人ともうんざりしていたから、また車の中で仮眠体制にあったの。いいかげん、こちらもだらけるわ」

「ふんふん、それで」

「きやーって女の人が叫ぶ声が聞こえて、二人は眼を覚ました。地下駐車場のシャッターは自動式で開閉する仕組み、開いたシャッターの下に女の人が立っていた。チームを組んだカメラマンが、あれは何だ？ってシャッターが開いた下のコンクリートの場所を指さしたの」

「そこに死体が転がっていた？」

「カメラマンがズームレンズで画面を引き寄せたとき、〃何？死体には首がない、って叫んだの。続けて何枚かシャッターを切った」

「決定的瞬間をモノにしたわけだ。だが、首がないのに比呂あすかとなぜわかる？」

「そのときはわからなかったわ。第一発見

者の女性が誰かに事件を知らせるために去ったあと、比呂あすかのマネージャーをとめている中年女性があわてたふうにやって来たのよね。マネージャーはこのマンシヨンの別室に住居を与えられているの。二人はテーブルに運ばれてきたモーニングサービス朝定食には手をつけぬまま、ずっと話し込んでいた。

「図らずも目撃者になったわけだが、警察は二人の目撃者の存在には気づいているのか？」

「今日のところはまだ気づいていないわ。でも、わたしの相棒は特ダネものの写真を撮るカメラにおさめたのよ。写真週刊誌に発表すれば、出所を追及されることになるかもね」

「しかし、報道関係者には守秘の権利もあるよ」

そこでやっと森中はコーヒーに口をつける。千香子は冷めたコーヒーをブラツクのまま、のど元に流し込んだ。

一息ついたところで森中が言った。

「なぜ、首なし死体だ？それも密室ならいざ知らず、誰の目にもつく場所で発見された。首が切断されているとしたら血が……」

「そうよね。食事中的話題じゃないけど、わたしの記憶では、血らしきものは現場には流れていなかったわ」

「他の場所、つまり、自室かどこかで殺して運んだ？」

「それも駐車場、シャッターは自動式のものだと言ったな。比呂あすかはシャッター」

に首をはさまれた？それも死後？」

「ちゃんとわたしも二十五倍の双眼鏡で見たのよ。シャッターではさまってどうのこうのという状況ではなかったわ」

「きみたちがいた距離と死体発見現場はどれぐらい離れていた？」

「そうね。四十メートルといったところかしら」

「夜中ずっと見張っていて他の車は見かけなかったのか？」

「何台かの車の出入りはあったみたいよ。カメラマンの彼が車のナンバーを全部撮っているはずだと思うけど」

「それが頼りだな」

「比呂あすかを張っている先々で、メモ代わりに彼は比呂あすかに関係あると思われる者の車のナンバーは撮っていたから」

「警察より頼りになる。それでカメラマン氏はどうした？」

「一番乗りの特権を生かして、いまも、事件現場あたりにカメラを向けているんですよ」

森中は他社の者に先駆けて特ダネものの情報を千香子から入手したことになる。

森中が三十六歳で千香子が二十九歳、二人はいまはやりのシングルライフ志向で、お互いのプライバシーに干渉しないことを条件に恋人同士の付き合いをしている。

この貴重な情報も恋人感情をお互いが持ち合わせていたからこそ、森中に知らされたものだった。

二人は再び、坂の上の事件現場にもどっ

た。森中は独自の取材活動を開始した。

比呂あすか殺人事件で、目黒警察署は、首なし死体であったことを初めからみとめ、記者会見場でも発表した。それで森中は、首なし死体で発見！のせっかくの千香子からの情報を他紙を出し抜き発表する機会を失った。

比呂あすかは、新曲がヒットチャートにのり始めたばかりの新進歌手で十八歳、アイドルタレントの道を歩みはじめたところだったので、マスコミ種になると見、各紙は一斉に激しい取材合戦を開始した。

森中の頭の中には、庄川征雄が首なし死体で発見されている事実と、今回の比呂あすかの殺人事件が一つになり、つながっていた。これは他社にはない視点で、それだけに、森中の取材には熱が入った。

午後五時すぎ、宮坂千香子が社会部の森中のところに、慌しく駆け込んで来、一枚の写真を持参した。

「例のほら、首なし死体の写真よ。写真週刊誌の発売日はあさってだから、それまでは門外不出、そのことをよく承知した上で限を通してね」

と、はじめに、千香子は森中に念を押しただので、森中は千香子をすぐに、いちばん奥の応接室に連れて行った。

千香子はジーパンの腰に装着したポシェットから大事そうに茶封筒を取り出す。それから予め用意したらしく、写真などを拡大して見るときのルーペを、応接室のテーブルの上においた。



「変なのよね。この写真…」

茶封筒から千香子はキャビネ版の写真を取り出した。

「早く見せろよ」

森中は引きたくなるようにし、写真を手に取った。マンシヨンの地下の駐車場を背景に、女の死体が転がっていた。

死体はあお向けで、両手、両足は投げ出したまま、カメラの角度はちゃんと首の切断口まで写し取ったもので、一眼見るなり、森中はシヨックを感じた。

「変なのがわからない？首の切断口…」

少し焦れったそうに千香子は言い、ルーペを森中に押しつけた。首の切断口に何か札のようなものがついていたが、森中は全体の構図に気を取られて見逃した。

森中はあらためてルーペを当て、その部分を拡大して見た。

「ふむ？これはお札じゃないか。何か字がしたためられているが、昔の字だな」

長方形の札は首の切断口を三分の一ほども隠していた。いわゆる護符というやつである。変女轉男（へんじよてんなん）の四文字が記され、四文字の呪言の下に、蓮台の絵が記されていた。

「変女轉男か。女、変じて男と成る。うむ、待てよ。どこかでこのおまじないの文句、眼にしたことがあるな」

森中は呟いたが、すぐには思い出すことはできなかった。

「それにしても何のおまじない？比呂あすかは死後、男に変えられてしまう？」

「うむ、それだ。こいつは立山信仰と関係のあることかも知れない」

「この前、森中さんに話を聞かされたあの女人禁制の山岳信仰のこと？」

「それそれ、おれが富山支局にいたとき、何かの書物でこの變女轉男のお札は見たような気がする」

「それに、比呂あすかは富山の出身、何かそのことと関係があるのかしら？」

「ちよつと待て。おれに考えさせてくれ」

森中は千香子を制し、十数秒間のことだったが頭の中を整理した。

千香子にも、山岳写真家庄川征雄殺人事件のあらましは話はしてある。

庄川征雄の死体が発見されたのが五月五日。そして比呂あすかが首なし死体で発見されたのが五月十一日、特に日付けに意味は見出せなかったが、富山に関係のある者で、二人とも首なし死体、その上、黒い雷鳥と文字符のちがいはあるが魔符様のものが、首の切断口に貼りつけられていた…。

千香子が、

「比呂あすかは富山の出身、何かそのことと関係があるのかしら？」

と問うたのは、頭の中では森中とすでに同様のことを考えていたからだだった。

「これはわたししの思いつきにしかすぎないけど、首なし殺人事件というのは異様よね。

わたしたち、たまたま、富山と東京で起きた殺人事件を知る立場にあるんだけど、偶然とは思えないわ」

「二人とも富山出身と考えれば接点はあるわ

「ただ」

「わたしたちだけしか知らないことだけど、二つの首なし死体には、意味のありげな魔符が貼りつけられていた……」

「警察もこの謎の文句の解明に動いているだろう。ただし、まだ富山で起きた庄川征雄殺人事件とは、何の関連性も見出してはいないはずだ。首なし殺人事件と言っても、富山県警のほうはそのように、発表はしていない」

「わたし、魔符の系譜について調べてみるわ。あいにくと、わたしは大学では、<sup>1</sup> 仏教美術の時代変遷史<sup>2</sup>、なんて、お固いテーマを選んじゃったけど、友人の中に大学助手になり、民俗・宗教学を勉強している助手の女性がいるの。彼女なら、宗教儀式とか、呪符とかいった類いのことには詳しいはずよ。早速会って、謎解きをしてもらうわ」

「うちの杜の資料室の連中にも調べさせるよ。黒い雷鳥の魔符についても調べてもらうことにしよう」

千香子は、森中に見せた写真をまた大事そうにポシエットにしまい込み、

「あさってまで新聞には発表しないでね。」

森中さんには一応、この四文字について先に調べる時間を上げたんだから」

と千香子は森中に恩を着せた。

「わかっているさ。しかし何だな。これも特ダネの一つにはちがいないのに、制限つきとはな。仲条の気持ちがよくわかるよ。うな気がする」

「なに？首なし死体に『黒い雷鳥』の魔符

のこと？それなら、仲条さんのほうが、よほど切齒扼腕（せつしやくわん）しているんじゃないくて？」

「そりやそうだ」

「ああ、それからこれ、カメラマンがものにした車のナンバー、新聞社のネットワークを使えば、持ち主がわかるんでしよう。比呂あすかをめぐる人間関係、あつと驚くような人物が登場するかも知れないわ」  
そう言い、千香子は別の茶封筒を出し、森中に手渡した。四、五枚の写真が茶封筒の中には入っていた。

「スキヤンダル種が、殺しのネタに発展するとはな」

「赤外線カメラで撮ったものもあるわ」  
「わかった。預かるよ」

森中は二つの茶封筒を内懐にしまい込んだ。  
だ。

立山信仰の歴史は古い。人を寄せつけぬ峻巖の山々は、昔から人の畏敬を集めてきた。俗世の穢れを知らぬ山々は、神の住む地であり、また、修験の場としても受け入れられ、山岳仏教を生み育てた。

山そのものが神だとする神体山の信仰は、立山に限らず、日本の各地で、また、世界の高い峯を頂く山岳の地に存する。山頂はもつとも天に近い清浄の地で、天の神が降臨する地であり、神が領（うしは）く地だとするのが山岳信仰の大本（おおもと）

の考え方である。立山一帯の山々は、神の領（うしは）く山とされ、ついで仏の来迎を拝する山とされ、神仏混淆（こんこう）の信仰を伝えて来た。立山の文字が写されている最古の文献は『万葉集』で『立山賦』一首が詠まれ、その中でも立山は神がうしはきいます山で、神秘につつまれた畏敬すべき山々と讃（たたえ）えられている。

現在は、雄山の頂上に雄山神社があり、イザナミノミコトとタヂカラヲノミコトが祀られており、剣岳頂上の社には、タヂカラヲノミコトが祀られている。

平安以前は神体山として信仰を集めた立山も、平安期以降からは仏教的な色彩にいろどられることになった。

深山幽谷に入り仏道を修行とする仏徒が、険しい山に入峰し、難行苦行に身を預けた。また、神々しい山容ばかりではなく、立山一帯にはこの世の地獄を思わせる地相もあり、立山信仰には、山中浄土と山中地獄の二つが共存した。

観光名所の一つになっている地獄谷は、いまも硫黄の黄色い煙を噴き上げている。他にもこの世の地獄を形象した場所がいくつも点在する。

日報新聞富山支局の仲条記者は、立山信仰については地元の出身者でもあり、ある程度の知識は得ていたが『黒い雷鳥の魔符』の謎を追う身になって、あらためて、何冊かの立山信仰に関する書物に眼をとおした。学者の著したものが多いので、ほとんどはお固い内容のものであった。

民間信仰に関する書物の中に『黒い雷鳥』についての記述はないかと、そちらも探ってみたが、いまのところ、仲条は何の資料も得てはいなかった。

庄川征雄殺人事件の取材で警察回りをし、仲条が社に帰り着いたのは午後二時過ぎのことだった。

森中から、比呂あすか殺人事件の詳報を記したファックスが入っていた。素姓調べを依頼された宇奈月町生まれの比呂あすかの首なし死体にも、魔符が存在していたことが記されており、仲条はショックを受けた。その事実を確認したくなり、折り返し、仲条は東京本社 of 森中を電話口に呼び出した。

「變女轉男の魔符が今度は？」

仲条はいきなり、その話題から切り出した。

「すでにこのお札の意味は知っているだろう。立山信仰の女人禁制に関係あり。比呂あすかは、死の世界で男に変身させられた。庄川征雄殺人事件と関連性があるなら二人目の犠牲者ということになる」

森中は、ハナから断言めいた口のきき方をした。

「『黒い雷鳥』の魔符に『變女轉男』の魔符、やはりこれは同一犯人による連続殺人事件と考えるべきなんでしょうね」

「東京と富山、離れているが、この視点で取材しているのは日報新聞社だけだ」

森中も心を昂ぶらせ、仲条に同意した。

「昨日、小矢部さんのところに行ってきた」

んですが」

仲条は二つの事件について考えるとき、何かの参考になるかと思い、小矢部吾平と会って話をしたときのことを森中に伝えた。紛失したノート『三』についてはやはり知らないと言い、迷惑顔をしたこと。岩垂六助の自殺の真相を探ろうと思ひ、『この老骨も死すれば天空を翔け、地鎮の鬼となるのだろうか』という一節を口にし、吾平にそれとなく問うたが要領は得なかったことなどであった。

結局、吾平は、岩垂六助が修験道を極めたこともある人物だから、立山信仰に伝わる民間信仰の一つを、このような文面にし、残したのではないかと、その話については、曖昧（あいまい）な答えを仲条に示すに止まった。

また、岩垂六助が、地鎮の鬼、たらんと考えたことは、元々、岩垂六助が自分は死んだら山々を守る神になるのだと信じていたふしがあったこと、黒部湖に身を投げたのは、自然を破壊したことへの罪を一身に負ったのではと思われ、吾平は仲条に話をした。これらの話を仲条は森中に手短かに伝えた。

「小矢部吾平は人を殺すような人間じゃないよ。だが、岩垂六助とは小矢部吾平は何年間か一緒に暮らしたこともあるし、黒い雷鳥に関する何か秘儀めいたことの一部ぐらいは知っている可能性はあるな」

森中も初めて、小矢部吾平の影の存在を認めるような発言をした。

「いまは警察も庄川征雄殺人事件の重要参  
考人として、小矢部吾平を見ているよう  
です」

「それで比呂あすか殺人事件だが……」

と前置きし、森中は、比呂あすかが生ま  
れるときに認知した父親が、山崎誠一郎で  
あることに特別の関心を示した。

仲条も電話を受けながら、そのことが気  
になっていた。

「岩垂六助の遺したノートを預かった人が  
山崎誠一郎という郷土史家。何の関連性が  
あるのか、いまのところわかりませんが、  
これが一本の糸でつながれていたとしたら  
？いえ、話はますます複雑になるだけす  
か？」

「視点としては悪くない。だが、いまは、  
現実起きた事件のほうに眼を向けるべき  
だろうな。おれの、記者としての勤を働か  
せた話を少しさせてもらっていいか」

森中は仲条に断りを入れてから、私見を  
述べた。

「比呂あすかはこちらの調べでは、室堂建  
設会長、長門蓮作の愛人説もあって、殺さ  
れたこととの関連性を言えば、関係なしと  
は言えない。彼女の後援会々長という立場  
もある。何か、トラブルがあればという前  
提に立っての話だが……」

「長門蓮作？」

仲条は山崎宅で見た古い写真のことを思  
い出した。長門蓮作と故山崎誠一郎は、黒  
部ダム完成祝いの記念写真に一緒に撮って  
いた？が、それだけで、とやかく、論ずる



訳にはいかないので仲条はこの件については、森中に伝えるのはひとまず止めた。話は、室堂建設のことに仲条は止どめた。

「室堂建設と言えば、富山県が生んだトップ企業の一つですからね」

「例の黒部ダム建設に参加して、大を成した会社さ」

「一つだけ、黒部ダム建設に関連して気になることがあるのですが、森中さん、聞いていただけますか？」

「いいさ。殺人事件、どうやら、二人で力を合わせて説明する必要がありそうだし」

「二人はいま同じ思いを、抱いた同士だった。」

「岩垂六助さんの遺したノートの件なんです。が、ノンブル『三』の欠落しているノート、黒部ダムの本格的工事が始まった昭和三十二年五月二日以降、約半年間のものが空白になっています。記録を調べてみると、大町ルートの岩削工事で、大破砕帯に突き当たり、湧水事故で多くの犠牲者を出した時期と一致しているんです。ノンブル『三』のノートは、この間の人身事故と何らかの関係があるのではと、ぼくは近頃、考えるようになったんです」

仲条は熱っぽく森中に問い掛けた。

黒部川第四発電所、通称黒四ダムの建設は大正時代から計画され、昭和三十一年七月に着工、幾多の困難を経て、昭和三十八年六月に完工している。

当時は世界からも注目を集めた一大プロジェクトで、それ以後、日本の高度経済成

長にも大いに寄与してきた。

その代償として、発表されているところでは、百七十一名の犠牲者が出ている。

「もう一つ、飛躍させて考えれば、首なし連続殺人事件を解く鍵は、その紛失したノートに隠されているってことかな。仲条立彦がそのノートを手に入れれば、闇の世界にスポットライトがあてられる」

「何です？闇の世界の出来事とは？」

「まことしやかに伝えられている黒部湖の人柱伝説、おれは小矢部吾平に聞かされた闇の夜、湖面に浮かぶ四つの青い鬼火の話、いまも信じているほうなんだよ」

「その話ならばくも、この春、千の平小屋に一泊して小矢部さんから直接、妖異譚（よういたん）として聞きました」

「どうだった？背筋が寒くなったか？」

「小矢部さんはあくまで創作話だと強調していましたが、夜の時間だっただけに、ぼくにも真実話に思えました」

「話を元にもどすが、問題の紛失ノートに書かれていたことについては、小矢部吾平は眼を通して知っているんじゃないか」

森中も吾平に特別の興味を持っているようだった。

「何しろ三十数年も前にざっと眼をとおしただけだからよくは覚えていないという話でした。ただ、さっきぼくが言ったように、昭和三十二年の五月から年の暮れにかけては、遭難事故が多発した時期だから、意図的に遭難記録は隠されたんじゃないかと」

「誰によつてだ？」

「表向きの発表では黒部ダム建設のときの犠牲者はおよそ百七十一人ということになっていますが、他所者も紛れ込んでいたし、事故も破砕帯の湧出や、落盤、発破作業時のもの、それに雪崩なども多発したので、それ以上の数になるんじゃないかと小矢部さんはおっしゃっておられました」

「延べ一千万人の人々が工夫として働いた。中には身許不明者もいたかも知れない」  
「ともかく、ノートの行方を追ってみます。それから森中さんから依頼の比呂あすかの出生の秘密についてその後知り得た事ですが、比呂あすかこと、野々村久美の父親、山崎誠一郎ですが、十年ほど前に七十歳で亡くなつていて」

「七十歳で？すると十九歳の比呂あすかは山崎誠一郎が六十歳の頃にできた子供ということになる。これは話としては少し不自然かも知れない」

「母親の野々村芳子について調べてみます。生存していればその間の事情がわかるかも知れません」

「ともかく匂う話さ」

「それから、こちらの赤根刑事には借りがありますから『變女轉男』の魔符が、比呂あすかの首の切断口にも貼られていたということはそつと耳打ちさせてもらいますよ。他には一切もらさないという約束で」

「それじゃ、成る可く、こっちの、特ダネ分署<sup>ニ</sup>に身びいきしてもらうことだな。犯人をとつつかまえるときは、赤根刑事登場

、そういう設定も悪くはないよな。ま、よろしく言うておいてくれ」

二人は長電話を了えた。

このあと、森中がファックスで送って来た『立山信仰』についての一文に、仲条はあらためて眼を通した。

次のような一文だった。

『立山信仰とその文化』のタイトルで富山図書館郷土史の会編纂とあり、編纂委員の中には、山崎誠一郎の名もあった。

『立山の護符をつくるための板木は一部古い代からのものが保存されているが、その中で女人救済の文言を有するものがあるので、ここに紹介しておく。「變女轉男」の四字と、その下に蓮台の絵を配したもので、これは女人禁制の山、立山にのみ存する特異なものである。いうでもなく、立山は江戸時代まではいわゆる女人禁制の山で、禁を犯し山中に入った女性は、神のいかりにふれて、杉の木や姥石に化せられるという伝説（諸国里人談）もあるように、開山以来、女性は山麓の芦峯寺の姥堂に詣ることは許されていたが、それ以上高い所に登ることは許されなかった。しかし、女性が浄土に往登するには、その死後に至って「變女轉男」の符を帯びさせる必要がある、女を変じて男に転じさせれば、山の神はこれを救済する、という主旨によって「愛女轄男」の護符が生まれたものとこの地ではされている』森中は東京の国会図書館に行き、この資料を収集していた。当然のこと、比呂あすか殺人事件の捜

査に当たっている目黒署の捜査員たちも『  
變女轉男』の魔符について、この書物を通  
して、知識を得ていることは、仲条にも推  
察することができた。

2

仲条は比呂あすか殺人事件の報告を受けた  
翌日、富山市から宇奈月温泉に向かった。

富山地方鉄道の特急で一時間五分の距離に  
ある。比呂あすかの母親である野々村芳子が  
、宇奈月温泉の古い旅館、雷光荘ホテルで二  
十数年前、芸者をしていたと、富山図書館の  
古い館員に聞いたからである。

宇奈月の街に着くと仲条は心洗われる思い  
になった。富山平野の北はずれ、黒部川の清  
流沿いに街は開けており、小台地に十数軒の  
ホテル、旅館が控えていた。

黒部川の河原には釣り客の姿も見える。

イワナ、ヤマメ、ニジマスなどが放流され  
ているので初心者でも釣りを楽しむことがで  
きるのだった。仲条は泊まり客がチェックア  
ウトしたあとの午前十一時頃の時間を選んで  
雷光荘ホテルを訪れた。取材の予約はとって  
いない。雷光荘ホテルの経営者が室堂建設、  
長門蓮作の長男である長門作之介だったので  
、仲条は何となく胡散（うさん）臭さを嗅ぎ  
つけていたこともあって、取材拒否に合うと  
困ると思ったのだ。フロントで、日報新聞の  
名刺を出し、主人の作之介を、フロアの応接  
間で待った。

用件は、宇奈月温泉の観光紹介と、仲条は

相手に都合のいいことを告げておいた。

作之介は宇奈月温泉の旅館業組合の理事長も兼ねている。間もなく作之介が応接間にやって来た。いやに腰が低く、仲条はにこやかに迎えられた。

小さな困み記事で、宇奈月温泉の春の話題でも掲載すれば、申し出た用件のほうは言い訳が立つことだった。作之介は作られたばかりの観光ポスターの人氣がよく、来た客に所望されてもう数枚お持ち帰り願いましたと得意気に言い、仲条の眼の前にもポスターを広げて見せた。

「近頃は若い人にも宇奈月は人氣がありますね。宇奈月スキー場に若い客を呼ぶことができたせいとか、ポスターなども若い女の子が、すてきだから下さいと申し出られるケースが増えました」

テーブルの上に、一、二枚のポスターを用意し、作之介は開いて見せた。

黒部溪谷の高い断崖を下からあおって撮った迫力のある写真や、夢をのせたふうのトロツコ電車などの写真があった。一応、観光宣伝用の話を作之介に聞いてから、仲条は本題を切り出した。

「あの、宇奈月出身の新人歌手比呂あすかが東京で殺されたという事件はご存知ですよ」

「知っていますよ。その噂で持ち切りですからね。しかしそれが何か？」

「いえ、今夏の観光シーズンには、比呂あすかのショーもこの地で予定されていたのに、残念なことだと思ひまして。実は比呂

あすかさんの実の母親である野々村芳子さん、今度のことでコメントをとりたくて、行方を探しているのですが、この雷光荘ホテルで昔、芸者をしておられたということまでは確認できたんですが、その後の行方がまったくわからなくて、それで、長門さんにお訊きすればと、伺ったような事情もありません

「：うむ。二十年ほども前のことじゃないですか。何と言ったかな。ああ、米若という名で座敷に出ている。コメントをとるって、何か殺人事件と関係でもあるのですか？」

一度はとまどいを見せた作之介だが、次には詰問調になった。

五十に手がとどこうという年齢の頃合いで、銀髪が半分ほども混じっている。鼻が高く美丈夫といった印象だった。父親の蓮作に似て背も高く、それに肉付きもいいので押し出しも利いた。

「どんなタイプの女性でした？」

「どんなと言われても」

仲条の問いに、作之介は不快感を明らかにした。

「過去をほじくり出してどうのというんじゃないんです。うちの社の東京本社の者から連絡がありました、警察の調べで母親の名が確認されているのに、未だ母親が名乗り出ないことで、警察は比呂あすかこと、野々村久美の母親の行方を探しているんです」

「と言われましても…」

「野々村久美が私生児で、認知した父親が亡くなった山崎誠一郎氏、ここまではわたしどもでもわかっているんですがね」

「：わたしのほうとは関係のない話でしょう」

作之介は少し険しい顔つきになり言った。  
。が、仲条は、作之介が眼を伏せ、貧乏ゆすりするように、膝頭を動かさせたのを見逃さなかった。

「申し訳ありませんでした。それにしても二十数年前の芸者さんのお座敷名よく覚えておられましたね」

仲条はかなり意地の悪い質問をした。

「いや、変わった女だったから。何というか、靈感のようなものがあってね、おさずり治療と言うのか、患部に手をかざすと治るといので結構、客に評判がよかったんだ」

「靈感治療ですか」

「そうだろうな。今度の事件だが、新聞には首なし死体だったと書いてあった。ほんとうなのかね。比呂あすかが歌手になったことは母親は知らなかったんだらう。殺されてはじめて野々村久美という本名が新聞に出たんだから。母親は富山あたりで娘を生んだと聞いたが、その後、人伝てに聞いた話では娘は施設に預け、どこか他所（よそ）の地に消えたという話だ」

「どこの施設ですか？」

「さあ？富山なのか他の地なのか、そこまではわたしは知らんよ」



作之介は突き離れた言い方をした。

「すみません。二十年も前の話をおききするほうがどうかしていますよね。ただ、比呂あすかさんが有名人なものですから、つい、余計なことまできいてしまいました」仲条はまた取材する機会もあると思い、相手に悪印象を与えないよう丁寧に詫びた。このとき、子供の泣き声があった。

客のいないフロアに五歳ぐらいの男の子が立っており、母親にでも叱られたのか、癩（かん）の強い泣き声を上げていた。「雅樹、どうした？うーむ、また、お母さんに甘えて叱られたな」

作之介は途端に相好を崩し、ソファから立ち上がると、雅樹と呼んだ子供のほうに歩み寄った。両腕で抱えとると、作之介は応接ソファのほうにもどって来た。

「わたしの孫で、おじいちゃん子なんですよ。旅館業をやっていると女将の役もさせられる母親は大変なんですわ」

と作之介は言い、孫の頬を寄せ、愛しそうに頬ずりしてみせた。

孫に眼のない好々爺（こうこうや）の人を、仲条は見る思いがした。

写真週刊誌『マンデイズ』が衝撃的な首なし殺人事件の現場写真を、事件発生三日後の同誌に発表した。五月十四日発売であった。そのままでは死者に配慮を欠くので

、写真は荒い粒子のものにされていた。生々しい表現を避けたのだった。また、魔符の存在についても写真誌は記事では触れていなかった。お蔭で森中は他社の者に、魔符の存在を気づかれずにすんだ。

『マンデイズ』編集部は、警視庁により写真の出所について、きびしく追及された。写真は明らかに、警察が殺人現場に到着する以前のものであったので、警察はその点を重視したのである。

当のカメラマンと、宮坂千香子は警察の取り調べを受けずに済んだ。

スキヤンダルネタの取材で張り込み中に、たまたま、事件発覚現場に出喰わしたこんな例が他にもない訳ではない。

直接、殺人嫌疑ある場合のみ、写真撮影者の名を明かすという条件つきで『マンデイズ』編集部は守秘の権利を守った。

森中は千香子と共に、小矢部岳男に会うことになった。

岳男のほうから、父親が庄川征雄殺人事件で嫌疑をかけられているので、その件で相談したいと申し出があった。

自分の車に千香子を乗せ、森中は岳男の待つ新宿西口の高層ホテルに向かった。

「状況証拠だけで犯人像を探れば、たしかに、小矢部吾平はサツに関心を持たれるだろうな」

と森中は小矢部親子に同情を示した。

「それで、警視庁の捜査のほうはどう進展しているの？」

助手席の千香子が中間報告を求めた。

警察の発表では、殺害現場は比呂あすかの住むマンション自室と断定されていた。胸などには刺傷痕はなく、たぶん扼殺したのち、首だけ切断されたものという見解を警察は新聞記者会見の場では表明した。

自室を検証の結果、浴室で首の切断が行われたあとが歴然としており、浴室内はシヤワーで一応清められていたが、部分的に血のしぶきの跡があり、ルミノール反応も検出されていた。

比呂あすかの女マネージャー、島野美津江が当初、参考人として取り調べを受けた。一階下の階に彼女は住んでおり、午前二時すぎに比呂あすかを自室に送りとどけたあとは、常用している催眠薬を飲み島野美津江は寝た。

第一発見者の管理人の妻が、警察が事件現場に来たあと、服装などから比呂あすかではないかと申し出、そのあと警察関係者が、島野美津江の部屋を訪れた。

が、まだ、薬のせいでは彼女は朦朧（もうろう）状態であったとされる。

マンションの管理体制は完全なものではなく、外部からの者の出入りをチェックするのは不可能だった。

地下駐車場からもつながるエレベーターに乗れば直接各階に至ることのできる設計になっている。

「想定できる状況としては、比呂あすかの部屋の合鍵を持っている者が、予め比呂あすかの部屋に入り待機していた上で、彼女を殺害、何の目的かはわからないが浴室で

首を切断、死体を人目のつく駐車場に遺棄、首だけを持ち去ったということが考えられる。大体、その線で警察は今度の事件の究明に当たっているようだ」「だったらまずまず、比呂あすかの顔見知りの者と考えられるわけだ」

千香子が男口調で応じた。

「その線が濃厚だろうな。ただし、ふつうの人種じゃ、首を切断するなどという酷いことはやれないよ。殺しのプロが今度の事件には介在しているんじゃないかとおれは思っている」

「それで、その殺しのプロ、森中弘光には心当たりがあるの？」

「ないわけじゃない。ただし、あくまで状況証拠だけの話さ。あとで見せるが、千香子からこの前に預かった車のナンバーの写真、持ち主を調べたら、これが多士済々のメンバーでさ」

「どういう連中だったの？教えて」

「いやいや、三人で会ったときにオープンということにしよう」

「もったいつけちゃって」

千香子は不満を示したが森中は一応お預けにした。車は新宿西口の高層ホテルに着き、二人は岳男と十二階にあるバーで会った。会うなり心配顔で岳男が事情説明をした。「このゴールデンウィーク、一日から四日まで千の平小屋に帰り久し振りにおやじと会ったんですが、ぼくが帰ったあとに、例の庄川征雄さんの事件が起きて、どうも、ぼくも事件に関連ある者とし

て富山県警はおやじやぼくもマークしているらしいんですよ。きのう、わざわざ上市署の刑事が二人、上京してきましたね、特に五月四日の行動、アリバイについてしつこく訊かれました」

「ははあ、遺体が発見されたのが五月四日の朝八時すぎということになっていきますからね」

「庄川征雄さんの遺体は他の場所から玉殿の岩屋に移されたと警察は考えているのでしょう？」

「何か他に突っ込んだ話はありませんでしたか？特に死体発見の状況について」

森中は庄川征雄が首なし死体で発見されたという事実を岳男が知っているかどうか探りを入れた。

「死体発見の状況ですか？ぼくは新聞発表の記事しか読んでいませんから、玉殿の岩屋で庄川さんの死体が発見されたこと以外は」

ほんとうに岳男は何も知らないようだった。

「驚かないで下さい。われわれが掴んでいる極秘情報をあなたの耳に入れておきます。庄川征雄の死体が発見されたときの状況ですが、庄川征雄は首を切断されていた」

「首を切断……」

おうむ返しに岳男は言い、一瞬、息を詰まらせた。岳男の驚きようからも、森中はこの青年は白だと判断した。

「富山支局の仲条君からの報告では、四月十三日 以来行方不明になっていた庄川征

雄は、ずっと冷凍体のままおかれていて、五月四日当日の朝頃に首が鋸（のこぎり）様のもので切断されたらしい。解剖所見でもそのことは実証されているようです。それと、胃の内容物の所見から、殺害されたのは四月十三日と、一応、警察は推断を下している」

「おやじが殺して、ぼくが死体遺棄、並びに損壊の作業を手伝ったと警察は都合のいいストーリーを頭に描いているってわけですか。四月十三日殺人説があるなら、ぼくは東京在、アリバイはありですよ」

岳男がぼそぼそとした声で言った。

残雪のある春山での出来事だった。庄川征雄の死体を冷凍保存して一定期間置いておくことなど容易なことであった。

しかも、千の平小屋の主人、小矢部吾平は庄川征雄と最後に別れた一人、それに、雪解けもすすんでいるいま、死体が移動されたものという仮定にたてば、殺害現場を特定するのはかなり困難な作業であり、これで死体が発見されなければ、完全犯罪の可能性だってあったことになる。

現に雪崩事故などでクレバスに落ち未だに遺体が発見されていない例は過去にも数多くあった。

「いまの首なし死体で発見されたという話ですがね。富山県警は猟奇事件として騒がれるのと観光シーズンの暗いニュースを避けるために、いまもってこの事実を発表していないんです。この件については絶対に口外秘ということにして下さい。おやじさ

んにも知らせないほうがいい。なまじ、知り得るはずのない話を知っていると、それこそ下手に勘ぐられることになりますからね」

「森中さんは、比呂あすかの殺人事件取材しておられるんでしょう？」

とつぜん、岳男が話題を変えた。

岳男とこの場で会う約束をしたとき、電話で森中は岳男に、比呂あすか殺人事件の取材に関わっていることを話した。

「何か？ひらめくものでも？」

森中には岳男がこれから述べようとしていることがおおよそ読めた。その結果の「ひらめき」という表現となった。

「いま、庄川さんの死体に首がなかったというのを聞いて、二つの事件には関連性があるんじゃないかと」

「そうなんです。比呂あすかも富山の出身、殺されている状況にも類似点がある」

「例の話はしなくてもいいの？」

と二人の話に千香子が割って入った。

千香子は魔符の存在について森中に匂わせた。

「いや、まだ調べが全部ついているわけじゃない」

「何ですか？」

と、岳男が不審の面持ちになる。森中としては、空を掴むような話をまだ口にはしなくなかった。富山支局の仲条に再度、小矢部吾平を訪ね、『變女轉男』の魔符について問い質すよう指示を出してある。

「二つの事件に共通する不可思議な話もある」

るのですが、そちらはいま調査中ですので、はっきりしたらあなたにもお知らせするようにします。それまで待つて下さい。たぶん、あなたやお父さんが、庄川征雄殺人事件で疑われていることを解き明かす鍵になるかも知れません。絡みがうまく解ければの話ですが。新聞記者稼業、警察より頼りになる場合だつてあるんですよ」

森中が一応、千香子の持ち出した話に説明をつけた。岳男も森中が力になると約束してくれたのでいくらか安心したようだった。実はこのとき、岳男は二人に、毎年四月二十一日の夜になると見る「妖夢」の話を話してみたいと考えていた。黒部湖の湖面に青白い四つの鬼火があらわれ、湖面が渦巻き、波の柱が立つ怪奇な夢と、今度の首なし殺人事件に何らかの関連性があるのかと頭をめぐらせたのだ。

が、突飛な話を持ち出すようで気おくれがし、結局、岳男はこの件に関しては口をつぐんだ。

ほんとうは今度の一連の出来事とも次第に絡みが生じて来るのだが、この世のものとは思えない夢の中身に、岳男はまず、自分自身の精神構造に問題があると、このときも、自分を決めつけていたのだった。

「ね、森中さん、車の中で話をした多士済々のメンバーについて、もう、口を開いてもいいんじゃない？」



と、千香子が森中に誘いを掛けた。

「何ですか、その多士済々のメンバーとは？」

事情を知らない岳男がたずねた。

千香子が、比呂あすかの行動調査のときに入手した比呂あすかをめぐる者たちの車のナンバー写真のことを簡単に説明した。

三日間の比呂あすかの行動を追跡し、千香子と同行したカメラマンは、五台の車のナンバーをカメラにおさめた。

その車のナンバーは、陸運局関係に強い記者の特殊ルートを借りて、持ち主を調べた。

「何か変に匂う奴が三人はいる。一台は一見右翼を装った暴力団統正会が正業の看板を掲げている松並不動産の車で車種は彼らがお好みのベンツと来ている」

「比呂あすかの死体が発見された前の夜に、暴力団風の者がヒルズマンションに出入りするのを見たという目撃者ありなんですよ」

「警察の聞き込みではそういうことになっている」

「でも、誰とはわかっていないんでしょう。警察のほうは」

「もったも、この車のナンバーで、統正会が関係していると判断するのは早計だが、政治家の犬伏美千雄の箱根の別邸に、比呂あすかが訪れたという証拠写真は、別にある。比呂あすかが乗っていた車のナンバーもちゃんと撮られている。問題は統正会一派が、犬伏美千雄の輩下にあると昔から取

り沙汰されていることさ。二枚の写真をつき合わせれば両者の関係は、はっきりしているが、これは机上の推量の域を出ない」と森中と千香子が証拠写真について論じ合っていたら、岳男が話の輪に入った。

「犬伏美千雄ですか。富山の生んだ大政治家ということになっていますが、犬伏美千雄は室堂建設の長門蓮作会長とは切っても切れぬ仲、建設族のリーダー、犬伏美千雄と組んだことで、室堂建設はいまも巨利を貧り続けています。お蔭で、ぼくの勤めている金子建設は善戦はしていますが、おいしいところはいつも室堂建設に持っていかれてしまっているのが現状です」

岳男は、二人が話し合っていたこととは、別の視点からものを言った。

「室堂建設の長門蓮作会長、かなり、あくどい人間だと聞いていますが、建設業界ならずとも政治家と結びつかないと、企業は大きくなれないと言いますからね」

「それだけではないんです。室堂建設が五年前に東京都の下水道、環八幹線の地下工事で陥没事故を起こし、三名の作業員が死んだ事件が」

「ああ、あの事故ね」

森中が相槌を打った。

新聞記事になり、問題になったが、下請けの建設会社が結局責任をとった。

「その後も同様事件が瀬発していますよ。室堂建設の名こそ表面に出て来ませんが、相変わらず、室堂建設は地盤凝固剤の規定注入を行わず手抜き工事を続けています」

岳男が内部告発めいたことを口にした。

「そう言えば、このところ、地下シールド工法とやらも、ケチばかりついている。たしか今年の二月にも」

「そうです。東京では東北新幹線工事現場のJR御徒町（おかちまち）近辺でとつぜんの道路の陥没事故、二名が生き埋めになりました。四年前には名古屋の地下鉄工事でもやはり二名が死亡、昨年十月には、これも室堂建設が関係している仕事ですが、関西新空港の空港島で、地盤沈下が続く、問題になっていたところ、地下トンネルの一部から海水が入り、三名が危うく死ぬところでした」

「みんな地盤凝固剤の薬液の注入不足？」  
「いまや業界では手抜き工事は当たり前なのですよ。その先鞭（ほんびん）を切ったのは室堂建設で、何度か、国会でも問題になり、会計検査院も不正工事を指摘して調査に入ったのですが、結果はいつもやむや。やはり、建設族の代議士たちが裏では暗躍しているのでしょう」

岳男は業界と政治家の結びつきを指摘した。当然、その中には建設族議員の首領である犬伏美千雄の名も入っているのだろう。地盤凝固剤が日本に初登場したのは昭和二十九年の営団地下鉄線工事からで、いまでは地下シールド工法の隆盛と共に薬液（ケイ酸ソーダ、セメント乳液他を混合の売上げは伸び、いまは、一千億円市場とも一説では言われている。

政治家共はこの巨大市場に群がり例によ

って甘い汁を吸っているというわけだった。話はまるでそれってしまったが、森中は記者の直感を働かせた。

「室堂建設の長門蓮作には、特に関心ありませんよ。比呂あすか殺人事件の犯人が誰かは現段階ではわかりませんが、比呂あすかの背後には、長門蓮作や、犬伏美千雄が登場してくる。建設業界の不正とは直接の関わりはないかも知れませんが、わたしは、犬伏美千雄につながる暴力団統正会も含めて、その動きを追ってみようと思っています」

「それからこれは関係ないことかも知れませんが、今年の四月に着工した東京臨海副都心計画の大プロジェクト、何社かの共同企業体でスタートし、金子建設も一部参加しているのですが、幹事会社は室堂建設で、犬伏美千雄と結託した結果の受注。裏ではまた多額の金が動いたのだろうともしばらの噂です」

「新聞に紹介されていたわ。その臨海副都心計画って、ファッション都市建設が目的で、海沿いの地域に繊維（アパレ）メーカーも参加、第二の、大人のためのファッション街をつくり出そうというのでしよう」

千香子は女性らしい関心の示し方をした。東京湾に沿った台場地区に総延べ床面積五十六ヘクタール、事業費二千七百億円規模のファッション都市が、いま建設の緒についていた。

「の岳男の話した東京臨海副都心計画の進行が、富山・東京で起きた連続殺人事件

と点と線で結ばれるなどとは、もちろん、森中は考えていなかった。

が、森中が嗅ぎつけた事件の背後にある人間関係は、いまは、闇の中で蠢（うごめ）いているだけだったが、すでにこのとき、森中は一步、その闇の世界に実のところは近づいていたのであった。

室堂建設は、黒部ダム建設で地歩を築き、中央に進出してきた建設会社で、昭和三十年後半からの日本の高度経済成長と期を一にして一大飛躍を遂げた。

（黒部ダムか。あの美しい人造湖、いまは何も語らぬが、室堂建設とは因縁浅からずだ。だがそれだけのことだ、いまは…）

森中は雑談を始めた千香子と岳男の話には耳を傾けず、ひとり、そんなことを考えていた。

「案外とつまらぬストーリーを警視庁の刑事（でか）連は頭に描いているようだよ。比呂あすかは新進歌手として注目を集めつつあったが、プロダクションの移籍問題でモメていた。比呂あすかを売り出しにかかったプロダクションは弱小プロで、これまで借財を抱え込んでいた。やっとなら比呂あすかがモノになりそうになったところで、多額の金を貸していた某暴力団関係筋の金融会社が、他社への移籍を斡旋（あつせん）した。金蔓に逃げられては困るので、プロダクション側は必死の防戦の

最中だった。一見暴力団員風の男が数人、比呂あすかが殺された当日、殺人現場のマンションの近くで目撃されたという話もある。警視庁の調べではね」

「こちらは、まだ事件解決の糸口さえつかめないでいるようです」東京本社の森中と富山支局の仲条の二人は長距離電話で互いの情報交換の最中だった。

「それで、問題の紛失したノンブル『三』のノート、そちらの行方はどうなった？」

「再度、千の平小屋の小矢部さんに問い合わせたんですが、要領を得ないままです。電話で話をしたんですが、あまり、触れて欲しくない口吻りだったものですから、執拗には追及しませんでした。もう一度、千の平小屋へ行って、黒い雷鳥の魔符について記憶がないか訊いてみようと思ってるんですが、その点、森中さんはどう考えておられます？」

「ノートに雑感を記した岩垂六助は黒部湖の完成を待っていたように入水自殺、その本人が記したノートが一冊欠けている。ちよつと脈絡のない発想でどうかと思うんだが、例の黒部の人柱伝説、あれは実際にあった話で、その関係者の一人に、自殺した岩垂六助がいるという構図、考え方としては強引にすぎるかな」

「いえ、ぼくも森中さんの説には同調しますよ。そのように考えないと、魔符などという現代離れしたものの存在について説明はつきませんからね」

「小矢部吾平に『黒い雷鳥』の魔符につい

てそれとなく問い質してみるというのも術だな。もし思い当たることがあれば、あの人は正直だから顔に出る。案外と何かヒントが、つかみ出せるかも知れない」

「ぼくはこれから赤根刑事にこちら側の収集した資料を提供する約束があつて会いますが、先輩から何か伝えておくことがありますか」

「そうだな。怪我をした腕だが、治さずにわれわれとしばらくは付き合ったほうが、面白い話に出喰わしますよとでも言つておいてもらおうか。ああ、それから、赤根刑事から依頼されている黒い雷鳥の魔符についてだが、いま、いろんな資料をつきあわせているんだが、それらしきものはまだ見つかっていない。もう少し、時間をくれと伝えてくれ」

森中はそう言い電話を切った。

仲条はもう一仕事するために富山支局のオフィスを出た。赤根刑事と会うために、富山市と上市町を結ぶ国道沿いにあるドライブインに向かった。

庄川征雄殺人事件は新聞報道ではまだ有力容疑者の名も報じていない。

死体発見から一週間が経つが富山県警は第一発見者の室堂山荘宿泊者の二名の女性客は事件に関連ない者として捜査対象から除外、警察に通報した室堂山荘の主人、樋口市郎、また、庄川征雄と四月十日に黒部湖まで登った三人の関西電力職員、それに千の平小屋在住の 小矢部吾平を事件に関係ある者として、引き続き、捜査対象者

としていたが、いずれも、捜査対象者を絞り込む体制にはなかった。

ドライブインには赤根刑事が先に来ていて、器用な手つきで煙草に火をつけているところだった。

「どうだ。ぶんやさんのほうは、犯人（ほし）に目星がついたかね」

「空の星は数えきれませんから。でも、少しだけ、星の数は読めてきましたよ」

仲条は席に坐るなり言った。

「ほう、黒い雷鳥座なんて星座はあるのかねえ」

「黒いままじゃ、何にも見えませんよ。黒い雷鳥の魔符についてもまだ当方としては手掛かりを得ていませんが」

「何だ。その話を聞きたくて、タクシーを使ってここまでやってきたんだぞ」

「すみません。やはり、話は闇の中、黒い雷鳥は人目につかぬよう身を隠しているということでしょうか」

仲条はそれでも、ワープロで打った雷鳥に関する調査事項を記した資料を赤根刑事に渡した。例の『千の平雑感』から抽出した岩垂六助の雷鳥に関する記事の抜き書きである。ざっと眼を通した赤根刑事は、

「この出所はどこだ？」

と、すかさず訊いてきた。

「黒部ダム建設当時に、千の平小屋を作った岩垂六助さんという山小屋の主人が書き残した雑記帖に記されていたものです」

「ふーむ。三十数年前の話じゃ、おれはまだ鼻ったれ小僧だな」



「この岩垂六助さん、黒部ダムが完成した翌年の春に、なぜか、黒部湖で投身自殺されていまして」

「当時の記録を調べて見よう」

「警察には記録は残されていますが、わたしのほうの新聞、繰ってみたんですが、自殺に関する記事は出ていず、公にはなっていないようです」

「国の総力を挙げて完成した黒四ダムの第一号の自殺者は、当時としてはやはり、秘密にされたんだろうな」

赤根刑事は資料をジャンパーのポケットにしまい込んだ。

「それから赤根さん、特別の情報をお耳に入れておきたいんですが、他言無用ということにしていただけですか。庄川征雄殺人事件で首なし死体と魔符の存在を教えてもらったこれはお返しというわけです」

と仲条は声をひそめ、比呂あすかの首なし死体の首の切断口に『變女轉男』の魔符がやはり貼られていたことを告げた。

「やつらは何か儀式でもやっているつもりなんだな。手口はまったく同じだ」

赤根刑事は背をまっすぐ伸ばした。眼が輝きを増す。

このあと、仲条は『變女轉男』の魔符の意味するものについても赤根刑事に説明を加えた。

「やっぱり事件というのは、地球儀の上から、つまり、距離を置いて見る必要があるな」

と赤根刑事は感じ入り、独り言のように

眩いた。

「地球儀ですか？」

「赤い日本地図の、その中の小さな一点しか捜査陣は見えていないという例えだ。ただし、首なし 死体で二人とも発見された。その共通点ぐらいは、うちの連中も意識しているとは思うがね。『變女轉男』に『黒い雷鳥』の魔符、二つとも立山信仰に関係ありか。この点に関しては富山県警はまったく、捜査の視点というものは持っていない。つまり、日本地図さえ眼には入っていないということだ」

「日報新聞としては、二つの殺人事件には関連性ありと見ていますが、しかし、二枚の魔符についてはこれ以上の説明は不可能の状況です」

「刑事をうならせるような確たるものは何もまだ出て来ない。その点では警察も日報新聞も同一線上に並んでいるというだけだな」

「もう一つ、情報を入れますから、赤根刑事の指示をお願いしますよ」

仲条は赤根刑事に、森中が関心を寄せてきた比呂あすかの出生の秘密と、その後の仲条自身の調査の結果も報告した。

比呂あすかは宇奈月出身で私生児、そして施設育ち、それに認知した父親が元富山図書館学芸員の山崎誠一郎という、比呂あすかこと、野々村久美に関するデータである。

赤根刑事は手帳を取り出し、この事実関係をメモした。

「認知した山崎誠一郎は故人で、十数年前に心臓発作で亡くなられています。本当の父親だとすると六十歳すぎのときの子供です。どうも作画的というか不自然なような気がして」

「六十歳すぎだって生殖能力はあるが、臭いことは臭いな。故人はともかくとして母親が生存しているならそちらの線を調べて見る必要ありだな」

赤根刑事が反応を示したので、仲条は雷光荘ホテルに行き、支配人の長門作之介に会い、母親の素姓とか、その後の行先をたずねたときの経緯を赤根刑事に話をした。

元芸者で、靈感のある女そして、比呂あすかこと野々村久美は幼少時手離され、富山市内の保護施設で少女時代を過ごしたという話である。

しばらく考えてから赤根刑事は言った。

「よくある話だが、山崎誠一郎が認知したという話は臭いな。誰かの子を姪んだが、世間をはばかって他人の名を借りたということか」

「故人の山崎誠一郎さんについて図書館員の同僚だった人にその人柄もたずねたのですが、女遊びをする人には到底思えないという意見がほとんどでした」

「ほとんど？じゃあ例外もありか」

赤根刑事はすぐに仲条のことばの端をつかまえた。

「室堂建設会長の長門蓮作氏とは生存中は親交があり、一年に一度か二度は会う機会があったようだ。豪放磊落（ごうほうろう

らいらく)で遊蕩児(ゆうとうじ)として富山では長門蓮作氏は聞こえていますからね。昔のいい時代の芸者遊びを山崎さんも経験したことはあったかも知れませんか。古手の館員の一人が教えてくれたんです」

「ふーむ。雷光荘ホテルの支配人、長門作之介と長門蓮作は実の親子だったよな。病弱だったもので室堂建設の仕事は継がず、温泉旅館を一軒与えられて宇奈月に残った。次男があとを継ぐべく室堂建設に入ったが、途中で政界に打ち出すべく、自由党の犬伏美千雄の私設秘書になった。代議士になるかと思っていたが経営者になる道を選んだ。次男の啓作がいまは室堂建設の社長をつとめている」

「赤根さん、馬鹿に詳しいんですね。そのへんの話には」

「就職時期になると県警のお偉いさんの息子共は、長門啓作の政界ルートを頼りに就職運動をするようだからな。話は下にも伝わってくるんだよ。長門啓作はおやじの指示もあつてのことだろうが、室堂建設を伸ばすために政界に顔売ったってことだろうな」

「すみません、話は横道にそれてしまったようですね。その、野々村芳子の件ですが、娘が東京で殺人事件の被害者になったのに、名乗りを上げて来ないというのも変な話ですよ」

「そっちの線は警察のルートで追跡調査してみよう。野々村芳子、生きていれば所在が確認できる可能性はある」

「比呂あすかに出生の秘密があれば、何か別の視点からの推理が、可能かも知れませ

ん」

「当然、警視庁のほうは、比呂あすかの身元の照会をすでに了えているだろうが、庄川征雄殺人事件とは関連づけてはいないだろう。富山県警も警視庁もお互い、まず、自分ところの犯人（ほし）を挙げるのが先だからな」

「それで富山県警はすでに有力容疑者を何人かに絞っているのですか？」

「物的証拠は『黒い雷鳥』のお札ぐらいだ。小矢部吾平、それに、室堂山荘の樋口市郎と従業員に強い関心を持っているようだが、絞り込むのはむりだろう。小矢部吾平についてはアライバイ調べはやっているが、あつてないようなもの、庄川征雄を宿から送り出したことになっているが、それとて、誰かが見ていたわけではない。そのあとのアライバイなど、証明しろと迫るほうがむりというものだ」

煙草のけむりを勢いよく吹き出し、赤根刑事が言った。

「小矢部さんが犯人だとは到底、ぼくには思えませんが」

「だが状況としては不利な立場におかれている。もっとも、庄川征雄が入山した四月十日から、遺体が発見された五月四日まで、この黒部の山々に入った者の数は七、八万人はいるからな。厳冬期で入山者の数が限られているのならともかく、庄川征雄の遭難の捜索が行われた四月中旬の時期だって、開通に備えて除雪車も何台も入っていたし、工事関係者も延べ三百人にはな

る。小矢部吾平を 有力容疑者として特定  
するのはこれまたむりだ」

赤根刑事は自分が第一線の捜索から外さ  
れている不満をぶつけるように述べた。

仲条記者と赤根刑事は、また、情報の交  
換をすることを約し、ドライブインを出た  
。爽やかな風が吹いていて外は心地良かつ  
た。背後を振り返ると、はるか遠くに銀雪  
を頂上にいただいた立山連峰の山々を見る  
ことができた。